

那珂編・艦これ二次創作小説

Clown

「なあ提督……アレ、なんとかならないのか？」

「ん？」

大湊警備府提督・斑目剣中将は、意見具申してきた艦娘の意図がよく分からず、軽く聞き返した。

「アレだよ、アレ」

「ああ、アレなあ……」

右目に眼帯、白いセーラー服に黒い外套と飾諸と言う、一風変わった出で立ちの艦娘・木曾が指さす方向を見て、斑目は何とも言えない表情を浮かべる。

彼女が指し示す方向には、オレンジと白を基調としたフリル過剰なセーラー服を身に纏い、くるくると回転しながらマイクのようなものを持って歌う一人の少女がいた。お団子頭を揺らしながら元気いっぱいに踊る姿は、舞台役者かたまたまアイドルか、と言った印章を抱かせるが、なにぶん彼女の舞姿が披露されているのは日本国海軍基地の敷地内であり、かつ工廠の裏にある資材置き場だ。

「いや、別に良いんだけどさ、邪魔になるわけじゃ無いし。でも、何かと目立つんだよなあ……」

「そう言えば夕張からも若干ノイローゼ気味だと陳情を受けていたな……部屋の窓からずっと踊ってるのが見えて気が散るとか」

「分かってたら対処してやろうぜ、提督……」

木曾のため息交じりの言葉に、斑目は若干配慮が足りなかったかと苦笑した。

二人がこうしたやりとりをしている間にも絶え間なく踊り続けているのは、大湊警備府所属の艦娘、軽巡洋艦の那珂(なか)だ。『艦隊のアイドル』を自称する彼女は、警備府内で突然リサイタルを開催したり、周囲の艦娘を巻き込んで踊り出したりと、何かと話題に事欠かない艦娘だった。

最近艦装の改装を終え、それに伴って改善された衣装がますますアイドル然とした衣装だったのに興奮した彼女は、それ以来工廠裏で密かに……と本人は思っている歌や踊りのレッスンを大幅に増やしていた。

「しかし、アレで那珂は結構活躍してくれているから、あまり言ってやるのもどうかと思ってな。夕張には申し訳ないことをしたが」

「確かに、資源輸送やら後進の指導やら、俺らがやってた分までこなしてくれてるから、俺も文句は言えないが」

木曾は何となく後ろ頭をかきながら、ようやく一息ついたらしい那珂の後ろ姿を眺めた。当の本人は仮想の観客に向かって「みんなありがとー！」などと大声を張り上げている。

下積みを横須賀で行ってきた木曾に対して、那珂ははじめから大湊に所属しており、警備府内では那珂の方が大先輩にあたる。だが、艦娘としてはほぼ同輩で、互いにあまり上下関係は意識していない。もっとも、那珂にとっては「艦娘はみんなお友達」だそうで、練度や経歴の違いは全く意味のないものと捉えているようだが。

「まあ、それだけでもないんだが」と独りごちると、斑目は改めて那珂の方を見た。

「それにしても、昔の那珂からは想像できないな」

「ん？　どういうことだ？」

斑目の感慨深そうな声に、木曾は疑問符を浮かべる。「いや、それがな」と斑目が話し始めようとしたとき、食堂から出てきたらしい艦娘達がこちらを見つけてやって来た。

「司令官さん、お疲れ様なのです」

「ちいっす、提督！」

「あー、提督ー！　おっつかれさん！」

栗色の髪の小柄なセーラー服少女・駆逐艦の電は丁寧に頭を下げ、明るい青みがかった髪にブレザー姿の女子高生風の少女・航空巡洋艦の鈴谷は軽く片手を上げ、そしてすみれ色の髪をはね放題伸ばした白いジャケットに袴姿の女性・軽空母の隼鷹は空の酒瓶をゆらゆらさせながら、三者三様の挨拶を交わす。

「おい、寄るな。酒臭いぞ」

「あん？　それはアタシのことかにゃー？　つれないぞー木曾ー」

「だから寄るなって言うのに」

本気で嫌そうな木曾と分かってやっている隼鷹に苦笑いを浮かべつつ、電は斑目に話しかけた。

「珍しいですね、司令官さん。外で立ち話なんて」

「ああ、少しな」

そう言って、斑目は軽く工廠裏の方を指さす。そこにいた人物を見て、電は色々と察したようだ。鈴谷もそちらを見て、「ほう、今日も頑張ってるねえ」などと感想をもらす。

そこへ、隼鷹を適当にあしらった木曾が戻ってきた。

「で、話の続きだが、昔の那珂は今の那珂とは違ったのか？」

「お、結構食いつくな」

木曾が他人の過去に興味を持つとは珍しい、と思いながらも、斑目は彼女が警備府に着任した当時のことを思い出していた。

「那珂がここに来た当初は、驚くほど無口でな」

「え？」

「マジで？」

何故か同時に鈴谷も食いついたが、電の「本当のことなのです」という言葉の説得力に、二人は腰を据えて話を聞く態勢を取った。隼鷹は事の経緯を知っているためか、そんな二人の艦娘の様子を後ろでニヤニヤ眺めている。

想像以上に期待の視線を送ってくる二人の圧力に若干たじろぎながらも、斑目は順を追って話すことにした。

○

那珂は、艦娘としての記憶を受け取る前は、陸奥湾で漁を営む夫婦の一人娘として大事に育て

られていた。物静かな性格で、おまけに引っ込み思案な性格であることもあってか、中学になるまで友人と言える友人はほとんどいなかった。

○

「マジで!?!」

「今とまるっきり違うじゃねえか!?!」

「いきなり話の腰を折るなよ」

初っ端から激しいツッコミを入れる二人に、軽く肩を落とす斑目。隼鷹は久々に新鮮な二人の反応に堪えきれなくなってきたのか、両手で口を押さえてフルフル震えている。

真偽を確かめるように二人が一斉に電の方を見ると、電は素の表情で再度「本当のことなのです」と言い切った。

斑目は咳払い一つして注意を向けさせると、再び話し始める。

○

特段貧乏では無いが裕福なわけでも無い。そんな家庭で、那珂は時に漁の手伝いをしながら平々凡々と暮らしていた。母は温和でいつも彼女に優しくだったが、厳格で寡黙な父には覇気が無いとよく叱られていた。確かに、彼女には将来の夢も特になく、趣味らしき趣味も持ち合わせていなかったため、ぼんやりと時を過ごすことも多かった。

中学も三年となり、進路を問われてもはっきりとした目標を持てなかった彼女だが、取り敢えず地元の高校へ進学だけはしようかと思っていたところへ、艦娘としての記憶が引き継がれた。

「え……なに、これ……」

記憶の引き継ぎには、ある程度個人差がある。ゆっくりと引き継がれ、違和感を感じぬまま艦娘としての使命を果たそうとする者もいれば、突然襲いかかる記憶の奔流に混乱し、その激流に吞まれてしばし動けなくなる者もいる。那珂は、どちらかというと後者だった。

頭の中に流れてくるこれまでの『艦娘・那珂』の記憶。そして全ての源となる、こことは別の世界の『軽巡洋艦・那珂』の記録。凄惨なまでの戦いの記憶は彼女の脳内で暴れ回り、激しい拒絶反応に見舞われた。

「いやだ……わたし、戦いたくなんかない……!」

何日も続く異質な記憶との戦いを、那珂の両親はじっと見守っていた。艦娘の『引き継ぎ』は、現在では一般に知られた事項だ。それこそ艦娘がまだ一般的で無かった時代は、狐憑きだの祟り神だのと言われたこともあったが、今は艦娘として生まれ変わり、人類の敵である深海棲艦と戦う彼女たちを誇りに思う親も多い。

昼夜を問わず入り乱れる記憶を次第に那珂は受け入れていったが、軽巡洋艦としての記録だけはよぎるたびに吐き気を催した。延々と続く、夥しい死。銃撃と砲撃と爆撃と、煙る硝煙の向こう側に映る誰かの最期。鼻孔を刺激する鉄のにおいは、砕けた船体のにおいか、それとも千切れ

た誰かのにおいか。

苛烈を極める惨劇に泣きじゃくる彼女を、母はしっかりと抱き留め、その辛さを受け止めた。那珂自身はその内容を語ったりはしなかったが、毎夜うなされる彼女の言葉から、彼女が見ているものを臆気には理解していた。だからこそ、余計な言葉をかけることも無く、ただ優しく抱きしめて彼女の居場所がここにあることを示し続けていた。いつもは厳しい父も、この時だけは彼女を気遣い黙って見守っていた。

那珂の元に大湊警備府から使者が来たのは、彼女が記憶を引き継いで一ヶ月後のことだった。「君が、新しく『那珂』の記憶を引き継いだ相馬叶(かなえ)くんだね。私は大湊警備府・司令長官代理の斑目剣少将だ。よろしく頼む」

「……」

少将になり、大湊の実質トップとなったばかりの斑目は、記憶を引き継いだばかりの艦娘の元には直々に出向くことにしていた。今でこそ多忙でなかなか時間を割くことは出来ないが、当時はまだ日本中の戦力を動員するような大きな作戦も無く、それくらいの余裕があった。

艦娘は、記憶を引き継いだ段階ではまだ艦娘としての責務は無い。彼女たちはこれから鎮守府、または警備府に赴いて船籍登録され、戸籍凍結の手続きを経て正式に艦娘として運用されることとなる。

また、稀なケースではあるが、引き継ぎが成されながら艦娘としての職務を拒否される事例もある。その場合、船籍登録されないまま艤装の元となる艦艇の一部が解体され、それとともに艦娘の記憶はまた別の人間に引き継がれることとなる。

差し出した手が一向に握られないことを受けて、斑目は後者の可能性を危惧した。これまでも一度、艦娘としての職務を拒否されたことがあったが、やはり同じように最初の挨拶から受け入れてもらえなかった。今回も、そうなるかもしれない。

しばし沈黙が続いたが、やがて目の前の少女が口を開いた。

「……あの……一つ、良いですか」

「ん？」

おずおずと紡がれた言葉を耳にして、斑目は僅かに頭を下げ、努めて柔らかな表情で言葉の続きを促した。少女は先ほどまでとは違う、まっすぐな瞳で斑目を見据え、素直な心の内を吐き出した。

「私が戦えば、もう、誰も死なずに済みますか」

「……」

流石に、軽々と答えるわけにはいかなかった。斑目は、ほんの少し表情を引き締める。

深海棲艦との戦いは、かつてに比べて格段に進歩した。彼らの出現予測や進撃予測、それによる被害予測の精度は向上し、事前の避難勧告などもスムーズに行えるようになった。艦娘のサポート態勢も増強され、戦闘支援艦の導入や通信技術革新による司令システムの確立で艦娘が轟沈する事態も激減した。

しかし、それでも被害がゼロになったわけでは無い。特に戦艦や空母と言った長距離攻撃を主とする深海棲艦による被害はなかなか減らず、沿岸に防護壁を建築するなどの策が講じられてい

るが、それも焼け石に水といった状況だった。

「私の両親は、漁師です。海で働く仕事です。深海棲艦に襲われたこともあります。親戚は、そのときの怪我で漁に出れなくなりました」

ゆっくりと、絞り出すように語られる言葉を、斑目は黙って聞いている。

「記憶を引き継いで、色んな死を見ました。色んな死に触れました。正直、怖かったですし、今も怖いんです。でも」

そこで区切り、彼女はちらりと背後を振り返った。そこには、心配そうに彼女を見つめる母親とまっすぐな瞳の父親がいる。

「その中に、私の好きな人達に加わるのは、もっと怖いんです。だから、だから私……」

迷いの無い、真剣なまなざしが、再び斑目の瞳と交差した。

「私、艦娘になります」

○

「……提督、それ、那珂の話なんだよな……？」

「ヤバい、私、今日从那珂ちゃんを見る目変わっちゃうかも」

それぞれ信じられないと言った表情で感想を述べる木曾と鈴谷。確かに、提督から語られた那珂の過去は、今の那珂とは全くかけ離れたような人物像だ。明るく、かしましく、目立ちたがり。今の那珂の印象とは正反対と言っても良い。

当然、その理由を知りたくなるのが正常な反応だ。

「で、どうやったらああなるんだ？」

「だよねえ。それが知りたい」

二人とも興味津々と言った体で斑目の次の言葉をじっと待っている。斑目は半ば諦めたようなため息をついて手近に転がっていた廃材に腰を下ろすと、続きを話し始めた。

○

『軽巡洋艦、那珂。概念変容・物理圧縮シークエンスに入ります』

船渠内にアナウンスが響き渡り、全員の視線が艦上に立つ一人の少女に集中する。少女は緊張した面持ちで、事前に説明を受けた通りにゆっくりと両手を広げた。

艦娘が艦娘としての新たな旅立ちを始めるにあたって最も重要な段階が、艦装圧縮フェーズだ。建造された軍艦の艦首に立ち、意識を集中して艦と一つになる。その感覚は受け継がれた記憶が知っているため、およそ失敗することはないが、念のためそれをサポートする艦娘が大本営から送られてくることがになっている。

「すまん、明石。毎度わざわざ来てもらって」

「いえ、これがお仕事ですから。それに、ここは食べ物美味しいですし」

艦装圧縮を調整・管理する艦娘・明石はそう言って笑った。彼女のここでの仕事は実質最

終フェーズを見守るだけだが、それ以外では艦の建造自体に深く関与しており、艦の仕様書、通称建造レシピはほとんど彼女が管理していると言われている。

二人が話をしている間にも、圧縮は進んでいく。少女の体が淡く蒼い光を帯び、彼女の乗る艦が軋むような音を立てて変形していく。砲塔や魚雷発射管、缶(ボイラー)と言った構成要素が特徴を残したまま少しずつ圧縮されていき、少女の体に装着されていく。

そうして最終的に、彼女の体は艦装を纏った艦娘の姿へと生まれ変わる。

「よし、艦装の状態も完璧ね。お疲れ様、そしてこれからもどうぞ宜しくお願いします、軽巡洋艦・那珂ちゃん」

「.....これが、私」

身に纏った艦装を見回して、晴れて艦娘となった少女・那珂は呆然とした様子で呟いた。腕や足に装着されたミニチュアサイズの砲塔や魚雷に戸惑いを覚えているようだ。艦船が無くなってがらんとした船渠の中心に一人たたずむ那珂に上がってくるよう声を掛けると、斑目は交換台を通じて警備府内の艦娘に招集を掛けた。

当時の大湊警備府は独自の艦隊を立ち上げてからまだ日が浅く、所属している艦娘は斑目が呉鎮守府時代から共に戦ってきた電、雷、名取、衣笠、鳳翔、霧島の六隻と、後から艦隊に加わった北上、隼鷹の二隻、合計八隻のみだった。

「那珂さん、大湊警備府へようこそ、なのです」

「よ、よろしくおねがいします.....」

那珂は軽巡洋艦クラスとしては名取、北上に次ぐ三人目で、面倒くさがりの北上よりは名取から艦娘としての戦闘を教わることが多かった。元々内気で争いごとの好きなタイプでは無かった彼女は、演習でもあまり積極的な攻撃が出来なかった。同じく内向的な名取よりも命中弾が少なく、被弾率が高いため、一時は霧島による猛特訓も計画されたが、先にメンタルが負けそうだと斑目の判断により中止となった。

「ですが、このままだと実戦に連れ出すわけにはいきませんか？」

「そうですね.....いつまでも演習というわけにはいきませんし.....」

霧島と鳳翔のもっともな言葉を受け、斑目も少し心配になっていた。先代の那珂は周囲が呆れるほど快活な少女だったという話だったが、彼女はまるで正反対だ。何とか彼女に自信をつけさせる手はないものかと、当時秘書艦であった電と一緒にあってあれこれ模索してみたが、一向に良い手が見つかる気配はなかった。

那珂の着任からおよそ二ヶ月が経った。演習の成果もそこまで芳しくないまま、那珂は一応実戦配備されることになった。とは言え、陸奥湾内の警備任務という、言ってみれば主力艦隊が出撃している間の留守番であり、まず実戦が行われることの無いポジションだ。

「ま、気楽に構えてようぜ、気楽にさー」

「は、はい.....」

鳳翔と入れ替わりで主力艦隊の一翼を担っていた隼鷹は、警備の間に暇があればことあるごとに那珂を連れ出し、演習や工廠見学につきあわせていた。戦闘が無くても覚えること、学ぶべきことはたくさんある。艦装や装備に触れ、その特性を知ることが自分の能力を十二分に発揮する

ための第一歩だ。隼鷹は少なくともそう思っていた。

軽巡洋艦である那珂と軽空母である隼鷹では艦装も装備も大幅に違うが、互いにその特性を知ることが悪いことでは無い。特に空母の運用する艦載機は当然敵である深海棲艦も使用している。その対策は軽巡に限らず全ての艦が知っておく必要がある。

演習場にきた隼鷹は、艦装から艦載機の圧縮された姿である飛行機型の紙切れを取り出し、那珂の目の前で放り投げた。彼女から離れた紙切れは着水する前にぐんぐん大きくなり、驚きに目を丸くする那珂の前で圧縮される前の九九艦爆に戻った。

「艦載機も、展開するとこんな大きさだろ？ これに比べたらアタシら豆みたいなもんだからさー、相当近づかないと相手の攻撃は当たらないわけよ」

「そうなんですか？」

「まあ、絨毯爆撃されたら終わりなんだけどさー」

「終わ……!？」

過剰な脅しに顔面蒼白になる那珂に「や、そうならないためのアタシ達なんだけどね」と手をパタパタさせながら笑う隼鷹。

「ま、そういうわけだから、今日は対空射撃の練習しようぜー。北上もいなくて暇だしさー」

この日は外洋の哨戒任務で主力は出払っており、残った三隻のうち北上は軽巡から重雷装巡洋艦への改造のため横須賀へ出向していた。斑目は艦隊の指揮のために執務室にこもっており、湾内への深海棲艦の侵入が発見された場合は隼鷹が旗艦として出撃する手はずとなっている。

いつもなら、およそ彼女たちの出番は無い。深海棲艦も湾内に侵入してくることはあるが、そこまで高頻度では無いし、つい最近まとまった群れを撃退したところだ。出てきてもはぐれた駆逐艦クラスがせいぜい一〜二隻。隼鷹一隻でも容易に沈められる。

だが、この日は。

『警報発令。警報発令。警備府正面海域に深海棲艦出現。ただちに迎撃態勢をとれ』

「げ、敵襲!? ついてねーなーもう」

「!!」

滅多に無い敵襲に、隼鷹は思わず天を仰いだ。例え敵が弱くても、実戦となれば怪我をすることもある。おまけに今日は北上もおらず、僚艦は実戦経験皆無の那珂のみ。最悪、那珂をかばいながら戦わなければならない。

「と、愚痴ってもしゃーねーか。那珂、出撃準備だ！」

「は、はい！」

演習海域から錨地に戻り、二人は艦装を実戦用に換装するよう要請した。ドックに参集した整備班が慌ただしく彼女たちの艦装を取り替えていく。演習に使用するペイント弾などが外され、実弾が装填される。隼鷹は用意されていた艦載機の圧縮形態である式札を懐に無造作に突っ込むと、隣で高角砲の取り付けを終えた那珂に言った。

「取り敢えず索敵して相手の数を把握するか。出来るか？」

「が、頑張ります！」

那珂の返事を聞くと同時、隼鷹は両腕を水平に振上げて叫んだ。

「軽空母・隼鷹、出撃する！」

抜錨と同時に主機の回転数を上げ、隼鷹は錨地を滑走する。遅れて、那珂が僅かに震える声で出撃を告げた。

「軽巡・那珂、出撃します！」

先行した隼鷹を追うように、那珂も速度を第一戦速まで上げる。演習を思い出しながら周囲を警戒、電探で敵の位置を探りながら航行し、前を行く隼鷹の合図を受けて右上腕にとりつけたカタパルトを前方へ向けた。

「零式水上偵察機、発艦します！」

合図を受けてカタパルトの端に取り付けられたミニチュアサイズの偵察機が勢いよく発艦し、空へと飛び立った。一定距離を離れると徐々に元のサイズへと展開され、敵艦隊を偵察するため高度を上げる。

偵察機にはカメラが取り付けられ、無線で映像が送られてくるようになっていた。艦娘の装備できる受像器は非常に小型だが、艦種くらいは識別できる。那珂は電探の画面と偵察機の映像を見ながら、緊張の面持ちで隼鷹について行った。

しばらく、静かな航行が続く。敵影はまだ見えない。誤報だったら良いな、などと不謹慎な事を考えながら先を行く隼鷹だったが、先ほどから肌にまとわりつく嫌な気配が消えない。天気は快晴なのに、何故か遠くに暗雲が垂れ込めているように見える。

そこへ、那珂の鋭い声が響いた。

「て、敵影！ 駆逐口級二体と……え、アレ……!?!」

「どうした、那珂。数は正確に伝えないとダメだぞー」

口級二体、という事は運の悪い方だな、と隼鷹がしかめっ面をするが、那珂の次の言葉が彼女から表情を消した。

「又級！ 軽空母又級です！」

「な……!?!」

思わず声をあげ、隼鷹は転送されてきた画像を自分の受像器で確認する。動き回っているためぶれているが、そこに映っているのは、歯の生えた巨大な二枚貝のような頭を持った二足歩行の異形。

軽空母又級。隼鷹と同じ、数多の艦載機を操る深海棲艦。

咄嗟に、隼鷹は左手に持っていた巻物を勢いよく広げた。飛行甲板を模した図柄が描かれたそれには、最初に仕込んであった艦載機の式札が並んでいる。

「攻撃隊！ 発艦しちゃって！」

隼鷹の命令と同時に、彼女の右手が紫の光を纏った。その中心に『勅令』の文字が現れると、札は次々と巻物の上を滑って空中へと飛び出し、展開・立体化して艦上爆撃機・彗星と艦上戦闘機・零式艦戦五十二型となる。

轟音とともに続々と飛んでいく艦載機を、隼鷹は真剣な顔で見送った。深海棲艦の空母には又

級とヲ級がいるが、ヌ級は軽空母という名が付くだけあって艦載機数は多くない。しかし、それでも異形の艦載機を使った遠隔攻撃が出来るヌ級の存在はかなりの脅威だ。何より、空からなら陸地を簡単に攻撃できる。今でも稀に流れ弾が陸地に到達して損害を与えることがあるが、相手がその気になれば陸地を狙って、更に言えば艦娘の拠点でもある鎮守府や警備府を狙って攻撃することも可能なのだ。

それ故、空母は例え軽空母であっても脅威だ。見つけ次第、すぐさま撃沈しなければならない。

隼鷹の艦載機が飛来した先で、小さな火花が散った。「始まった！」と叫ぶ隼鷹の横で、那珂は緊張に身を縮込ませた。電探には既に三隻の敵艦を捉えているが、零式水上偵察機は帰還途中に撃ち落とされ、艦載機同士の交戦状況は分からない。対空電探も無く、敵艦載機は、目視での確認となる。

しばらく電探と空を交互に見つめる那珂。その目が、黒点を捉えた。

「ちっ！ 討ち漏らしたか！」

隼鷹の声に、那珂は慌てて高角砲を構える。そんな彼女を鋭く制し、隼鷹は原速を維持したまま黒点の方向へと移動した。那珂もおそろおそろそれに続く。徐々に詳細な形があらわになる敵艦載機。漆黒の機体に、昼間でも分かる程煌々と輝く不気味な緑色の光を点すそれは、下顎を喪失した鮫の頭を彷彿とさせる。

討ち漏らした機体数は二機。近づくにつれ羽音のような不気味な飛行音を振りまくそれらを睨みながら、隼鷹はタイミングを計る。敵機が大きくなり声をも上げ、爆撃のために高度を下げる素振りを見せた、その時。

「撃て！」

「はい！」

那珂の腕に取り付けられた高角砲が、次々に火を噴いた。空中で展開され、二十キロを超える質量となった砲弾は、敵艦載機の進路上に網のようにばらまかれる。二機の艦載機は網をかいくぐろうと機体を左右に展開するが、一足遅い。接触した砲弾が炸裂し、損壊した機体は推力を失って墜落していく。

無事撃墜したことに、ほっと胸をなで下ろす那珂。隼鷹も思わずガッツポーズをとったが、ふと視線を移した先を見て一気に青ざめた。

「那珂、危ねぇ！」

「え……」

それ以上声を出す間もなく、那珂は真横にはね飛ばされた。僅かに遅れて、耳をつんざくような爆発音と熱風が彼女に襲いかかる。爆風に煽られ横転しそうになるのを何とか堪え、那珂は姿勢制御に努めた。ようやく態勢が落ち着くと、何が起こったのかも分からぬまま爆風の起こった方を見、那珂は言葉を失った。

「く……そ！ ドジったぜ……」

煙が晴れた先に見えたのは、艦装を破壊された隼鷹の姿だった。ほとんどの装備が喪われ、飛行甲板である巻物も半分消失している。装甲も兼ねている服もボロボロで、あらわになった肌に

は多数のかすり傷や火傷の痕が痛々しく刻まれていた。

隼鷹が見たものは、墜落寸前に敵艦載機から放たれた航空魚雷だった。まさか撃墜したと思った機体からそんなものが飛び出すとは思っていなかった那珂には、それが見えていなかった。

「そ、そんな……隼鷹さん、私をかばって……！」

那珂の目に、みるみるうちに涙がたまっていく。油断した。初めて敵を倒した安堵が、慢心を招いた。そんな後悔が彼女の視界を覆い尽くそうとしたとき、両頬に衝撃が走った。

「こら、よそ見すんな……！」

目の前に、煤だらけの隼鷹の顔があった。苦しげな表情をしながらも、口角は無理矢理笑おうとしているかのようにつり上がっている。その両手が、那珂の両頬に当てられていた。隼鷹の方を向くように、顔が固定されている。

「……アタシの飛行甲板は壊れて、着艦できても発艦できない。つまり、今のアタシはただのお荷物ってわけさ」

「そ、そんな……」

「だから、那珂」

真剣な表情で、隼鷹は那珂の右腕をつかむ。そこに搭載された電探のモニターを、その光点を、彼女に見せつける。

「最後は、任せたぜ」

三つあった光点。それが今は一つになっていた。二隻は隼鷹の艦載機が沈めたのだろう。残っているのが口級か、それとも又級かは分からないが、いずれにせよ放っておく訳にはいかない。

那珂の顔を不安げな表情が一瞬よぎり、しばらくしてそれが覚悟の表情となる。隼鷹はそれを見ると、安心したように彼女の肩を叩いた。

「行きます！」

反転し、那珂は電探に映し出された光点に向けて最大戦速で疾走した。見る間に敵艦との距離が縮んでいき、ついに目視で確認可能な距離となる。

携帯した単眼鏡で見えてきたのは……巨大な魚のような機影。駆逐艦口級だ。近くには、隼鷹の艦載機が撃沈した又級の残骸が浮かんでいる。口級は那珂の姿を認めると、速度を上げて回頭した。巨大な口を開けると、内部に格納されている主砲を彼女の方へと向ける。

砲撃。那珂と口級が一撃目を放ったのは同時だった。どちらも狙いがはずれ、那珂の砲弾は口級の手前へ、口級の砲弾は那珂の後方へ着弾する。着弾確認した那珂は素早く次弾を装填、第二射を行う。これも同時、そして先ほどとは互いに反対方向への着弾。

互いに夾叉した状態で、二隻の艦が最大戦速で近づく。次の一撃で決まる。次弾は、既に装填されている。しかし、双方とも撃たない。限界まで近づき、より精度を高めるため極限まで狙いを絞る。

そして、彼我の距離が一〇〇を切った時、砲撃音が鳴り響いた。音は——一発。那珂が急速回頭したのは、それと同時だった。一杯まで振り絞った主機がビリビリと異音を響かせる中、巨大な砲弾が那珂の鼻先を掠める。着弾の衝撃が海面を激しく揺さぶり、立ち上った水柱が視界に覆い被さろうとする、その直前。

那珂の主砲が、口級の側面を捉えた。

ドン、と言う爆発音が、辺り一面に響き渡る。次いで、吹き上がる炎。主機の回転数を下げ、那珂は荒い息をしながら水煙の向こうが晴れるのを見た。

頭部を喪い、胴体の一部としっぽだけになった口級が炎を吹いて沈んでいく。ゆっくりと海中に没し、その姿が見えなくなったとき、那珂は思わずその場にへたり込みそうになった。しかし、そこへ主機の回転数も満足に上がらない隼鷹がのろのろとやって来たため、那珂は慌てて彼女の元へと向かう。

「隼鷹さん！」

「おー、やったな、那珂」

ボロボロの隼鷹を支えるように、那珂は彼女に肩を貸した。そこで初めて気付いたというように、隼鷹の体から力が抜ける。本当は立っているのもやっとなのだろう。すぐにでもドッグに入渠させなければ。焦る那珂に、隼鷹は力なく笑って言った。

「アタシは大丈夫だから……それより、岸の方を見みな」

「え……？」

口級を追って、那珂は大分沿岸に近いところまで来ていたらしい。見ると、そこにはたくさんの人々が集まっている。那珂が驚いていると、彼らは彼女たちに向けてそれぞれに叫んだ。

「ありがとう艦娘達！」

「海を護ってくれてありがとう！」

「隼鷹ー！ かっこよかったぞー！」

「那珂ちゃん初陣勝利おめでとー！」

次々と飛び込んでくる感謝の言葉。そして、賞賛の言葉。隼鷹は何とか力を振り絞って彼らに向けて手を振り、那珂にも応答を促す。那珂は感極まったように涙ぐむと、彼らに向けて大きな声で叫んだ。

「みんなー！ ありがとー！」

そんな彼女の声が聞こえたものか、沿岸の人達は一斉に大きな拍手で彼女を送った。那珂は彼らが見えなくなるまで、ずっとずっと、大きく手を振り続けた。

○

「……え、そんなのがきっかけなのか!？」

「……マジで？」

木曾と鈴谷の驚愕といったリアクションに、提督は無言で頷いた。隼鷹は「いやー、あの時の那珂は輝いてたなー」などと笑いながら膝を叩いている。開いた口が塞がらない二人は、同時に電の方を見たが、電はほとんど表情を変えないまま、僅かに視線だけを二人からそらせた。

「本当のことなのです……残念ながら」

(今.....残念ながらって.....)

(残念ながらって言っちゃった.....)

ぼそりと呟かれた、普段の電からはまず聞かれないような後半の言葉を拾って別の意味で驚愕の表情を浮かべた二人に苦笑すると、斑目はゆっくりと立ち上がった。

「その事がきっかけで、那珂は自分が目立つことに快感を覚えたらしくてな。その手段としてアイドルを選んだのは、それが一番最初に思いついたからだと言っていた」

話の間に再びダンスの練習を開始していた那珂を見て、提督は目を細める。そうは言っても、人の性格はそんなにすぐ変わるものでは無い。恐らくは、それまでにも色々と自分との葛藤があったはずだ。それらを乗り越え、ああして笑顔を振りまく存在になれたのは.....まあある意味では成功なのだろう。

そこまで考えて、斑目は一つの提案をした。

「それじゃ、今度那珂のもう一つの戦場を見に行くか」

「もう一つの、戦場.....？」

斑目の言葉に、木曾が首をひねる。彼は懐から手帳を取り出すと、ぱらぱらとめくって今月の予定を確認した。運良く、明日がその日らしい。

「明日の一九〇〇、警備府の入り口に車を回すから、そこへおいで。特別に夜間外出許可を申請するから」

「あ、ああ.....」

「なになに、夜のお出かけとかチョー楽しみなんだけど！」

「やったー！　ただ酒が呑めるぞー！」

三者三様のリアクションを見ながら、斑目は「じゃあ皆、後でな」と言い残して電とともに去って行った。盛り上がる二人を尻目に、木曾はよく分からないと言った表情で提督を見送り、もう一度那珂の方へ目をやる。

彼女はやはり空想の観客に向けて愛想を振りまきながら踊り歌っている。そこへ工廠からライトグレーの髪の艦娘が出てきて両腕を振り上げ怒鳴り、那珂は慌てた様子で向こうの方へと逃げていった。その様子を見て苦笑すると、木曾は「明日、ね」と呟き、その場を後にした。

○

薄暗い室内は、既にかんりの熱気に包まれていた。

斑目に連れられて繁華街に出てきた艦娘達は、とあるバーの地下に作られたライブハウスに来ていた。コンクリート打ちっ放しの壁面だが、床は落ち着いたウォルナット材が使われており、照明効果もあってかあまり寒々しさは感じない。

階段を降りた正面奥には一段高くなったステージ。その手前にはテーブルと椅子が配されており、室内の後ろ半分には何も置かれていない。とはいえ、既にテーブル席は勿論、空白のスペースにもかなりの人数がひしめいており、少し歩いただけですぐに人にぶつかってしまう有様だ。

一階のバーでそれぞれ飲み物を受け取っていた彼女たちだが、隼鷹を除く二人はそのある種異様な光景に圧倒されていた。何しろ、そこに集まった人間の中にはかなりの数の軍関係者がいるのだ。警備府で顔見知りの人間を既に何人か見かけており、テーブル席の方には普段はほとんど見かけないような上層部の人間すら見え隠れしている。

「おい、アレ陸軍の荒垣大将じゃ……」

「鈴谷の見間違いじゃなかったら、横須賀の日根野少将がいるんだけど……」

小声でやりとりする二人を尻目に、隼鷹は手にしたワインボトルを手にテーブル席へと消えていった。どうやら馴染みの場所らしい。斑目は隼鷹の勝手な行動にため息をついたが、不可思議な光景に狼狽える木曾と鈴谷を手招きして比較的人の落ち着いたスペースへ二人を誘導した。

「提督。一体ここはどういう場所なんだ？ 滅多に見ないような軍上層部の連中が何食わぬ顔しているんだが……」

木曾の疑問に、提督はステージの方を指さした。ステージにはたくさんのスピーカーと照明が置かれ、中央にはマイクスタンドが鎮座しているが、今はそこに誰もいない。首を傾げ、意味が分からないと言うように肩をすくめる木曾。そのとき、突然部屋の照明が落ちた。

「!？」

急に暗闇に包まれて身構える木曾だったが、次の瞬間、今までに感じたことの無い程の混沌とした衝撃が彼女を襲った。

「みんなぁー!! 那珂ちゃんだよぉー!!」

「ウオオオオオオオオオオツツツツ!!!!」

「!?!?!?」

「わ、わ、なにコレなにコレ!!」

突如響き渡った元気っぱいの声と、それに呼応する轟音とも言うべき大勢の叫び声がフロアいっぱいには響き渡った。同時に煌びやかな照明がステージを照らし、その中心に白とオレンジを基調としたフリル満載のセーラー服少女が躍り出る。お団子頭に白い髪留め。くりっとした目で笑顔を振りまき、マイクを手にした右手をカ一杯掲げる彼女は。

「な、那珂ぁ!？」

「すごーい!!」

大歓声の中、軽快なポップスの音色に乗せて歌い踊るのは、紛れもなく那珂だった。工廠裏で見せていた動きよりも数段華麗で、かつ大胆な彼女のダンスに、場内は熱狂の渦と化す。陸軍の厳めしい大将も、遠く離れた地の海軍少将も、まるで少年のような生き生きとした表情で舞台に食いついている。

あまりの出来事に啞然とする木曾。鈴谷は早くもこの環境に順応したのか、めざとく見つけた大湊の整備班に混じってステージに向けて声援を送ったりしている。那珂のワンマンショーは三曲ぶっ続けで行われ、休憩のために一度引っ込んでも会場の熱気は冷めないままだった。

斑目はまだ茫然としている木曾の隣に立ち、いつの間にか手にしていた二杯目のドリンクを手

渡した。そして、自分も手持ちのノンアルコールビールに口をつけながら、木曾に話しかける。

「ここが、那珂のもう一つの戦場だ。なかなか凄まじかっただろう？」

「あ、ああ……凄まじすぎて、もうなにがなにやら……」

言いながら、手渡されたカクテルを口に含む木曾。辛口のそれで渴いた喉を湿らせると、改めて彼女は周囲を見た。

彼らは皆、那珂のステージに夢中だった。夢中になって腕を振り上げ、声を張り上げ、そして夢中を共有した彼らは今、同じ言葉を共有している。老いも若きも、男女の別も無く、階級すらも関係ない。彼らは今、ステージの前で平等になっている。

木曾は、工場で歌い踊り続ける那珂を思い出した。いつもいつも練習していたのは、このためだったのか。単に趣味でやっているのだろうと思っていたが、実際はそんなレベルを遙かに超越していた。

確かに、これはもう一つの戦場だ。彼女はこれだけの観客を前に一人戦っているのだ。ここにいる一人一人の心を、平等な世界に解放するために。

「……そうだな。確かに凄いよ、那珂は」

「だろう？」

そう言って、斑目は笑みを浮かべた。木曾もつられて笑う。参った、降参だと言う風に両手を軽く挙げ、そのままカクテルを飲み干した。ぐっと喉に突き刺さる辛みを堪え、彼女はぷはっと息を吐いた。

そこへ。

「あー！ 木曾ちゃんだー！」

「うえ!？」

いつの間にかステージに戻ってきていた那珂が、隅にいた木曾を見つけてマイクで声をかけた。当然、室内にいた全員の視線が彼女に集まる。木曾は今までに感じたことも無い数の視線に晒され、顔を真っ赤にして狼狽えた。

「え、ちょ、おい！ そんなところから大声で呼ぶな！」

「提督に鈴谷ちゃんと隼鷹ちゃんもいるー！ みんな見に来てくれたんだー！ ありがとー！」

軽く手を上げる斑目と、「いえー！」などと声をかける鈴谷と隼鷹。那珂はステージ脇の階段からフロアに降りると、目を白黒させる木曾の元へ駆け寄った。

「折角だからー、木曾ちゃんも一緒に踊ろう！ 楽しいよー！」

「ば……！ そ、そんなこと出来るか！ いやいやまで離せおい聞いているのか！」

本気で嫌がる木曾を、何処にそんな力があるのかという程の腕力で引きずっていく那珂。笑顔のまま見送る斑目に普段は絶対に口にしないような罵倒の数々を浴びせながらも、木曾はステージ上まで引っ張り上げられていく。フロアの熱い声援に応じて鈴谷と隼鷹もステージ上に上がり、未だかつて無い羞恥に打ちのめされた木曾を巻き込んでカオスな宴は続いていく。

そんなゴキゲンな艦隊のセンターで、那珂は今日も勝ち鬨を上げた。

「艦隊のアイドル、那珂ちゃんだよー！ これからも、よろしくう!!」

(了)